



りんご幼木における急性衰弱症の診断ポイントと 改植時での当面の対策

【1 成果の概要】

平成26年以降、県南部を中心に、改植後数年経過した主にJM7台りんご幼木において、「急性衰弱症」（病原：胴枯細菌病菌）が発生しています。多発園地での発生特徴をもとに、診断のポイントと改植時における当面の発生防止対策について、以下のとおりまとめました。

(1) 多発園地での発生特徴

ア 排水不良区画で発生します。樹液漏出（図1A）と急性枯死は、定植3年目以降に顕在化します。

イ 台木別では、JM7台が多く、M.26台では少ない傾向です。

ウ JM7台の樹液漏出樹は、翌年も樹液を漏出し、かつ衰弱・枯死しやすい傾向です。

(2) 診断のポイント：樹液漏出による外観症状に加えて、形成層の褐変腐敗など内部症状を併せて確認して下さい（図1）。

(3) 改植時での当面の対策：排水不良園で改植する際には排水対策を講じるとともに、発症例が少ないM.26台樹を植栽して下さい。

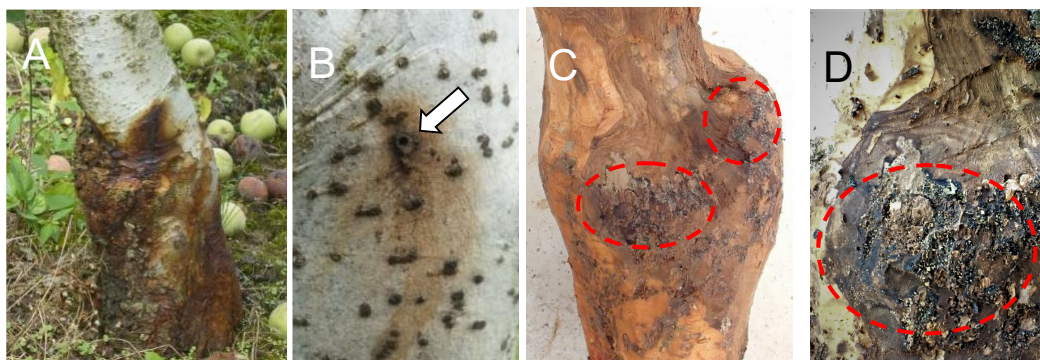


図1 樹液漏出樹の外部及び内部症状

A：台木部の樹液漏出

B：主幹害虫脱出孔（矢印）からの漏出

C、D：接木部周囲に形成された根原基（点線部）の黒変腐敗と形成層の褐変腐敗（剥皮後）

【2 留意事項】

- (1) 本成果は、改植時での対策を提示するものであり、既発生園地での対策は現在検討中です。
- (2) 春先の樹液漏出は凍害でも起こるが、凍害の場合は幹の南側や南西側に多いのに対して、本症では特定の方角に偏らない点で区別できます。
- (3) 本病菌の伝染経路は不詳ですが、多発園地では接木部付近に不定根（根原基から滞水条件下で特異的に発生）の形成量が多い傾向なので、この不定根が侵入門戸である可能性について検証を進めています。
- (4) 本病菌による他病害では高温・多湿で発生しやすいので、近年の夏期高温や集中豪雨が本症の顕在化に影響していると考えています。